

初めての教育実習で聞いた保育者と子どもの言葉

—「保育内容・言葉」の視点から—

田中麻紀子

TANAKA Makiko

本論文は、初めての教育実習で学生が聞いた保育者と子どもの良かったと思う言葉(会話)をまとめたものである。これを書くことで、普段何気なく使っている言葉を見直すきっかけとなるようにしていく。そして、自分がどのような保育者を目指すのか、どのような保育者になりたいのかを考える手立てにできるようにし、どのような言葉をかけると子どもの言葉の表現力を養える保育者になることができるのかを考えていきたい。また、授業の資料として活用し、より実践的な授業が行えるようにしたい。

キーワード：保育内容・言葉 幼稚園実習 保育者 子ども

1. はじめに

本学では、1回生後期から「保育内容・言葉1」の授業が始まる。その中で、子どもの言葉の発達や事例を通して子どもの「言葉」について学んでいる。教育実習は、1回生10月の2週間である。したがって、教育実習までの「保育内容・言葉1」の授業は3回しかない。その3回の内訳は、シラバス(表1)のとおりである。実践に即した内容は実質、何も学んでいないのと同じようなものである。

今回、学び始めた学生に取って「言葉」に視点を置いた実習での課題を出した。ほとんどわかっていないからこそ、初めて聞く保育者と子どもの「言葉」がストレートに入ってくると考えたからである。保育者は、毎日子どもと過ごし毎日子どもと会話している。それにより気をつけてはいるが、出てくる「言葉」を一つひとつ意識せずに話していることも多くある。

また、子どもの「言葉」を育てる保育者としての自覚も必要である。それが本当に大切であることをどれだけ保育者が意識しているであろうか。

しかし、改めて自分の「言葉」について考えることも日々の保育に追われ、なかなか出来ないものである。

保育者と子どもの「言葉」を、学生たちはどのように捉えたのであろうか。今回は学生が記述した4つのテーマのうち1つのテーマである「幼稚園実習で保育者が子どもに話していたことでよかったと思った話(言葉)」を取り上げた。その中のエピソードを挙げながら、学生がどのようなことを感じたのか。また、どんな「言葉」を話す保育者がいいと思い、その「言葉」により、子どもたちに何が育っているのかを考えていく。

なお、エピソードに関しては、学生が書いたものをそのまま挙げている。表現や文法が適切でないところもあるが学生の書いたとおりにしている。ただ、部分的に抜粋しているものもある。

2. 方法

調査期間 平成28年10月31日・11月1日

調査対象 「保育内容・言葉1」履修者

Dクラス・Fクラス

短期大学1回生名53名

(小学校実習希望者4名を除く)

・実習へ行く前の第3回目の授業で、以下の課題を出す。

①保育者(園の先生)が、子どもに話していることで良かった話や言葉を見つける。

②逆にいやだなと思った話や言葉を挙げる。

③子どもの会話で楽しかった、面白かった、感動した話を見つける。

・実習終了後の授業内でエピソード記述をする。

・エピソードの記載は、研究に協力するとチェックがあった30名を対象とする。

・すべてのエピソードを引用していない。

*倫理的配慮

研究への協力は自由であること、協力しなくても不利益にならないこと、エピソードを使用する際は個人名・園名は匿名にすること、を書面、口頭で伝えた。

表1「保育内容・言葉1」シラバス

科 目 名	: 保育内容・言葉Ⅰ
単 位 (授 業 形 態)	: 1単位(演習)
担 当 者	: 土田 ますみ・田中 麻紀子

授業の到達目標

ねらい: 保育内容の中の領域「言葉」のねらいと内容を理解し、さらに乳幼児の「言葉」の育つ道筋を理解する。

目標: それぞれの発達に応じた指導のあり方を理解し、具体的な実践・指導のイメージが持てるようにする。

授業の概要

講義(演習)…子どもの言葉の実際と保育者の援助の実際について、事例を読むことやVTRを通して学び、その援助の背景にある言葉の理論や保育の方法について考える。

全体の授業計画・内容

1. オリエンテーション

「領域 言葉」のねらいと内容

2. 言葉をめぐるワークショップ

3. 言葉の育ちと保育 (言葉の育つ道筋)

4. 言葉の育ちと保育 (言葉の前の言葉)

5. 言葉の育ちと保育 (一つ前の言葉)

6. 小テスト・まとめ

7. 絵本の読み聞かせ (教材研究)

8. 絵本の読み聞かせ (実践①)

9. 絵本の読み聞かせ (実践②)

10. 絵本の読み聞かせ (実践③)

11. 言葉の育ちと保育 (人とつながる言葉 ①)

12. 言葉の育ちと保育 (人とつながる言葉 ②)

13. 言葉の育ちと保育 (人とつながる言葉 ③)

14. 言葉の育ちと保育 (言葉で考える)

15. 小テスト・まとめ

準備学習の方法

予習のあり方: 授業内容に関して前もってテキストに目を通しておく。

学習のあり方: 子どもの言葉を育てるために、保育者はどのような役割を担うべきかを考えながら受講する。

復習のあり方: 授業中に学んだ項目について自宅で再確認する。

成績評価

小テスト(40%)、レポート・実践 (30%)、受講態度 (30%)

※受講態度…言葉に関する科目であるため、授業態度に関しては厳しい評価を下します。

テキスト

戸田 雅美 編著 「演習 保育内容 言葉」
建帛社

参考文献

「幼稚園教育要領解説書」文部科学省、

「保育所保育指針解説書」厚生労働省

3. 考 察

I. 注意するのではなく、認めて気づかせる

1

一日の活動の話をしている時に子どもたちがうるさくなったり、製作している時に、子どもたちがあきて違うことをはじめてしまったり、注意する場面の時に、先生は、注意するよりも先にしっかりやっている子どもに対して「〇〇くんいい姿勢でお話聞いてカッコいいね」などほめていました。

それをする事で、ふざけていた子どもたちが、ほめて欲しくてちゃんとしていたり、注意するより、先生も嫌な気持ちにならないし、子どもたちも自らちゃんとできていい言葉がけだなあと感じました。

私が実習で先生と子どもが話していたことでよかったと思うことは、個人に対してではなく、全体にののですが、歌の時間、みんなあまり元気がなく、一人の女の子の声だけが大きく聞こえていました。そのときに、先生が「〇〇ちゃんの声すっごく大きくて上手やわ～」と言いました。するとみんなも負けなぞと大きな声で歌い始めました。

声かけ一つでみんなの気持ちを引き出して、本当にすごいなと思いました。私も、そんな風に言葉かけができるようになったらいいなと思います。

片付けをする時は、「〇〇くん自分のじゃない物も片付けられるの！えらい！」と個人を褒める事で周りの子ども自主的に動き出すので、良い所を見つけて沢山褒めていきたいと思った。

片付けの時、ただ単に「ごみを拾おう」ではなく「何個拾えるかな？」「〇〇ちゃんいっぱい拾えてるね！」などと言葉かけをすることで子どものやる気が一気に変わったのが目に見えてわかりました。

歌や話を聞く際でも、きちんと口を閉じて待っている子や大きな口を開けて楽しそうに歌っている子がいたら名前を出してほめていて、確かにそういった言葉をかけることで子ども達自身が私もがんばろう、と思え、より良い活動になるんだなと思いました。

全クラスであそんでいて片付けを一生懸命している時に、A君頑張ってるね。Bちゃんすごくお片付け頑張っているねと言葉かけを行っていて、他の子の片付けのやる気を引き出していたところです。

ここに挙げたエピソードは、すべて子どもたちを注意してさせるのではなく、認めてやる気を引き出していることに学生が共感している事例である。そのうち、片付けの場面が3例ある。子どもにとって片付けは、やりたくない活動のひとつである。しかし、片付けをしなければ次の活動には移れない。

保育者が時間に追われ、焦れば、焦るほど片付けは進まなくなる。そんな時、片付けをせずに遊んでいる子どもをつい叱りがちである。それを敢えて頑張っている子どもを認めることで、片付けをしていない子ど

もたちも「片付けよう」という気持ちにさせている。

巫森・横山(2011)は、保育者の姿勢に必要な3点があり、その2点目を次のように述べている。『「〇〇してはいけません」「どうして〇〇したの」という類の禁止言葉を多く使わないことが基本である。「〇〇より、こうした方がいいと思うよ」というような、いわゆる子どもが前向きに考えることのできる、ポジティブな言葉を意識して選択することが必要であろう。

例えば、保育の中に「片付けなさい」「お片付けですよ」という言葉がある。子どもは遊びを中断され、なおかつ、やりたくないことをするというネガティブな気持ちになるのではないだろうか。「これから、お弁当ですよ。周りをきれいにしようね」というポジティブな言葉の方が気持ち的に意欲が沸くのではないだろうかと考える』

ここに挙げた保育者たちは、子どもたちがポジティブになれる「言葉」を選択しているといえる。また、聞いていた学生たちも注意を与えたり、叱ったりするのではない保育者の「言葉」の選択に共感し、自分もできるようになりたいと思っている。

学生たちは、文中で“褒める”という「言葉」を使っているがここは敢えて“認める”と言いなおしておく。子どもたちのやろうという気持ちを引き出すのは“褒める”ことではなく“認める”ことであるからである。

また、片付けの際にかける「言葉」と片付けに関して本吉・笠間(1981)が著書の中で、『子どもにとって何が一番嫌いか」というと、「片付け」と言うくらい子どもたちは片付けが嫌いです。ある子どもは「ぼくは遊んでいて面白い時、おしっこ行きたくなるのが嫌い」と言って、「なるほど」と思ったことがあります。

子どもたちにとって、片付けるという必要感はあるのだろうか。こう考えて、一昨年の五月末から六月にかけて、「片付けなさい」ということばを使わずに様子を見ることにしたのです。その時は、片付ける必要を感じさせるという目標もって、幼児全体でやり始めたのにもかかわらず、第一日目の様子をみて落胆しました。先生方にはねらいを達成するために、もっともっと散らかして第一日目で子どもたちが、これは汚い、大変だ、と感じるように活動してほしいのです。でも何日も続けるうちにあの汚れ方です。いろいろな不便を感じて子どもたちの方から「片付けよう」ということばが出てきました。(中略)日本中の園生活をする子どもたちが「みんなのために片付けるの」と思い

こんでいるのでしょうか。』としている。

保育の本質である、「自分から進んで」動くことの出来る意欲のある子どもに育てるには、「やりなさい」では育たない。嫌なこと、やりたくないことでも意欲がわくような「言葉」が必要である。

Ⅱ. 保育者の言葉がけで子どもがかわる

1

外で遊んで転んだ子どもに対し、先生は「大丈夫？ 痛かったね」ではなくて「〇〇ちゃん強いから大丈夫！！」と声かけをしていて転んでも泣くのを我慢している子がいて強いなと思いました。先生の言葉かけによって子どもは変わると改めて感じた瞬間でした。

2

お遊戯会の服を着ているとき、一人の男の子が「何で！ こんな服いやだ」と泣いていました。その子はサルの役で男の子も一人。そんな時に先生が「男の子一人だけですごいよ。かっこいい」と言い、その子も少し笑顔になりました。

3

平均台をしていて、一人できない子どもがいました。私は、平均台の補助をしていて、その子に私は手を貸して平均台を渡らせてあげました。でもそれだったらいつまでもその子どもは一人で渡ることができません。その時、その子が泣いてしまっただけで1回平均台が出来たくらいで泣いてしまっていました。

先生も一度は、少しこわい顔で、「大丈夫、一人でいける。ゆっくりでいいからがんばってみよ」と言って少し進めるようになりました。でも落ちてしまっただけで泣いてしまいました。「落ちてもいいから最後までいってみよう」と言いました。それでその子は1回落ちながらも渡りきることができました。それを何回もつづけて、やっと落ちずに渡りきれた時、先生が喜びとうれしさを顔に表して「できたね！ 〇〇くんできた！」といってグーっとなぐりました。

やっぱり言葉でその子ができる、できない変わってくるんだなと思いました。おこる、ほめる、のメリハリが大事だなと思いました。

子どもにとって、園は家庭と違い我慢しなければならないことも多い。また、保護者にすぐに甘えること

も出来ない環境の中で、精一杯頑張っていることも事実である。

そんな中、ここに挙げたエピソードは、頑張りきれずにくじけてしまいそうな子どもたちの気持ちを、保育者の一言で奮い立たせた場面である。特にⅡ-3ではこれを目にした学生は、励ますことの大切さはわかっている。

しかし、実際、自分が励ましたからと言って子ども達がすぐに動き出すのかといたらそうではないことも身をもって経験することができた。また、これまで築いた保育者と子どもとの信頼関係の上だからこそ「言葉」で子どもがかわったことを感じ取った。

違う視点から考えると、Ⅱ-2のエピソードに登場する男の子は、きちんと自分の気持ちを表現しているともいえる。「こんな服いやだ」とはっきり言うことは、子どもによっては、難しいこともある。心の中で「嫌だ」と思っているのに我慢して保育者の言うとおりにしている子どもも多いであろう。

だが、この子は自分の気持ちをしっかりと表現できている。保育者は、まず、そのことを認めることが大切ではないだろうか。「〇〇くんは、嫌なことを嫌だと言えるなんてすごいね。」「嫌なことを、嫌だということは、難しいことだよ」など子どもの気持ちに寄り添うことで、その子はもっと保育者に対して信頼を寄せるのではないかな。それにより、普段から自分の気持ちを素直に表現することに結びついていく。一見、わがままのようであるが、これも一つの自己表現である。

萩原・渡辺(2016)は、著書の中で、「ダダをこねるという力」ということについて述べている。『子どもの気持ちを大切にしていくことは、保育の基本です。でも、いつもいつも子どもの思い通りにしてあげるわけにはいきません。なので、そのことを子どもにいていいに説明するのですが、なかなか理解してくれない時は、いったいどうすれば・・・。

最近、ブロック遊びにはまっている3歳の男の子。昼食の時間になっても、なかなか片付けられません。何度もお約束をしたり、早めに声をかけたりと、工夫はしているのですが、最後はいつも、「イヤだ〜！」「先生のバカ〜！」とひと暴れ。その後は、けろっと昼食を完食なのですが、保育士は浮かぬ顔です。「どうやって、わかってくれるのかしら」と悩む日々・・・。

でも、これでいいのです。子どもの持つ“ダダこね力”がちゃんと発揮されているのですから。子どもは、大人が考えている以上に理解力があるものです。お片

付けをしなくてはならないことも、頭ではちゃんとわかっているはず。でも、気持ちの自己コントロール力がまだ未熟なので、自分で自分の気持ちを押さえられなくなってしまうことがあるのです。そんな時子どもは、信頼できる大人に向って“ダダをこねる”という形で、もてあました気持ちを吐き出し、心の平静を取り戻そうとします。ですから、ここぞというグッドタイミングでダダこねができる子どものほうが、気持ちの切り替えも早いのです。これも、子どもが持つ自己成長力です』としている。

サルを嫌がった男の子は、まさに“ダダこね”ができる子どもである。

また、最近の子どもたちは、世間話はとてもよくするが、本当に困ったことがあったときになかなか言い出せない子どもが多い。保育現場では、それを克服すべく、様々な方法を取っている。

筆者が担任をしている時も、自分の困ったことを言い出せず、そのまま家に帰り、家で母親に話をする子どもが多かった。話を聞いた母親は、園に電話をしてくる。それにより、本人が何も話さなくても問題が解決してしまうということが多かった。

これでは、いつまでたっても子どもが自分で自分の気持ちを話すことが身につかない。

そこで、年長児の保護者をお願いをしたことがある。「もし、子ども達が家に帰って「園でこんなことがあった」とトラブルや困ったこと等を話した時、「それは、聞いてあげることはできるけれど、解決することはできない。園であったことは、園でお話して解決しようね。明日、先生にお話してごらん」と話してください。そして、子ども達が自分で話せないこともあるかもしれないので、子どもたちにわからないようにメモを入れるか、電話をしてください。くれぐれも、話をしているところを子どもたちにわからないようにしてください。」とお願いした。

そして、翌日子ども達が話をしてきたら「よくお話してくれたね」と言って話を聞き、問題解決を考える。

話をしてこなかった場合は、こちらからさりげなく「最近、何か困ったことはないかな」と話を導き出す。

あくまでも、子ども達が「自分で話をした」「自分で話しができた」という気持ちにさせることが、目的である。一度自分で話をして解決できると、困ったことを話すことに対してのハードルが下がるようだ。

これを繰り返すことで、自分の気持ちや考えを話すことができるようになっていく。

Ⅲ. 時には厳しく話をする

1

良かったというより、勉強になった話がありました。子どもたちが排泄するときで、女の子が男の子の排泄している所を見て、おちょくり、それが嫌で男の子は女の子をなぐってしまってケンカになった場面です。その後、子どもたちが「〇〇君やで」「〇〇ちゃん言いやった」と友だちのせいにして少し言い合いになっていた時に、先生が「〇〇くんのせいとかじゃなくて、自分がやったか正直に言いなさい」と真剣に子どもたちと向き合っていたのが印象に残りました。

その時に、自分で相手に伝わるように言い、意志の強い子に育てることが大切だと感じました。

2

きちんと一人ひとりの名前を呼んで挨拶をしたり、話しかけたりしていたことです。幼児が悪いことをしてしまった時に、どれだけ自分が人の嫌がるようなことをしたのかを保育者がしっかり幼児に伝えていました。幼児にわかるように「じゃあ先生も〇〇くん、(ちゃん)にしてもいいの？」と問いかけて自分で気づけるようにしていました。

どれだけお友達に嫌なことをしたのかを幼児にしっかりと伝えなければならないんだと思う言葉がけでした。

3

大縄跳びで遊んでいて、途中から遊びが変わってしまっていて綱引きのように縄を引っばって幼児たちが遊んでいました。私が何度も「大縄跳びしようよ。綱引きみたいにしたら危ないよ」と言っても全くやめませんでした。しかし、先生が「大縄は、綱引きじゃありません。遊び方が違います」と一言言うと、幼児たちは引っばり合うのをやめていました。

普段から共に過ごしている先生で信頼関係が築けていてすぐにやめたということもあると思いますが、使い方が違っていると具体的に言うことが大事だと思いました。

4

劇の発表会の踊り決めの時に、うるさかったり考える気がない子どもたちに、「今日はもう踊り考えるのやめよう。先生が決めてやる劇じゃないもん。みんながピーターパンやるっていったんでしょ。みんなが作る劇なのに考えられないんだったら先生もお手伝いしない！」と自分たちで作っていくんだと思えるような言

葉がけができていて、劇をするねらいを保育者の中に持っていないとかけられない言葉だと思った。

5

静かにする場面で、「それはおかしい!」と、話をしている子にピシヤリと言う。けじめをつけるという意味で、おかしいことはおかしいとしっかり言うことが大切だと学んだ。

ここに挙げたエピソードはⅡのエピソードと違い、厳しい「言葉」を子どもに投げかけている。子どもに寄り添い、子どもの気持ちを汲んで保育をすることをどの保育者も心がけている。だが、相手を傷つけるようなことがあった時、また、危険がある時など時として厳しい「言葉」で子どもに気づかせなければならないこともあるであろう。

しかし、厳しく叱ることは、保育の中で本当に必要なのか。叱るのは、保育者の都合で物事を進めたいから、保育者の思うようにならないからということはないのか。

今井(1996)は、『最近女性のことばが荒っぽくなっています。家庭でも園でも、圧倒的に多く聞かれることばが「早くしなさい」「だめです」「いけません」といわれる指示語、否定語、禁止語です。生活にゆとりがなくなるとたちまち、こうしたことばが多くなるのはなぜでしょうか。

「だめですよ」「いけません」ということばは、いつとき子どもを抑制することはできますが、時間がたつとすぐ効力を失ってしまいます。制限的で、子どもとの間にことば(思考)がやりとりされないからです』といっている。

それでは、どのような「言葉」をかけると子どもたちは危険なことをやめたり、友だちの気持ちを考えることができるようになったりすることができるのか。もちろん「言葉」だけでなく、毎日の保育者や友だちとの関わりの積み重ねがあつてのことである。その積み重ねの一つは、“人の話を聞く”ということではないだろうか。自分の話したいことを話すより、人の話を聞くことは難しい。

では、どのようにすれば、人の話を聞くことのできる子どもになるのか。『相手の話すことがしっかり聞ける子ども、その場で適切な行動が取れる子どもに育てるためには「だめ」「いけません」ではなくまずその子の心づもり—どうするつもりだったの?—を引き出す

ような応答的な会話になるように心がけたいものです』

『私が保育者になりたての頃、詩人でもあり教育者でもあつたお茶の水女子大学の周郷博先生が講演で次のように語って下さったことを、私は今でも思い出します。「保育者はよく、うるさくしている子どもたちにむかつて『おしゃべりしているのは誰かな?』『誰が静かにできるかな?』などと話すのを聞くが、どうも、子どもに遠慮しながら、ことばをこねまわしているように思えてならない。必要なことは『静かにしてほしいの』と静かな声でスパッと言うべきです。その方が子どもの人格を認めたことになるんじゃないのかな」納得できることばに出会え、充足感をかみしめたことです』今井(1996)。

学生たちにも、ただ単に厳しく話すのではなく、子どもたち自身が考えられるような「言葉」を投げかけられるような保育ができる保育者を目指してもらいたい。

Ⅳ. 子どもの想像力を膨らませる

1

作品づくりの時、説明をしているんだけど、子どもに問いかけるように話していて、必要最低限のことを言い、子どもが自ら発想を広げられるようにサポートしていた。「これはどんな構造?」「どんな形?」「何色っぽい?」など。

2

10月の実習だったので「秋」を中心にした保育内容がほとんどでした。表現遊びという保育で子ども達が秋の風やどんぐり、落ち葉などを保育者のピアノに合わせて表現していた時に、保育者が「どんぐりは今どんな気持ちなの?」と子どもに問いかけていました。子どもたちは少し戸惑っていました。

その時に保育者が「どんぐりにもね命があるんだよ。落ち葉にも風にも木にも全部命があつて大切にしないといけないんだよ。秋のものの気持ちになって表現しようね!」と話をしていてどんなものにも命があつて子どもに教えてあげようと話をしているのがすごく良いなと思いました。

3

クラスで歌を歌う練習をするときに、新しい歌を覚える日がありました。新しい歌は、いちょうの葉っぱ

の歌で、そのクラスは3歳児のクラスだったのでいきなり歌詞だけを覚えるのは難しいと感じる年齢でした。その時に先生は、みんなで散歩に行った日の話を始めました。「公園に木があったよね。いちようの木なんだけど、どんな葉の形だった?」「その葉っぱは何色に変わる?」「木から葉っぱが落ちるときどうやって落ちてた?」と、子どもに質問をしました。その質問の答えがそのまま歌詞になっていました。

子どもがいちようの葉っぱを想像しながら、ひらひらと落ちていく歌詞の部分で自然に手で動きを作ることができ、楽しく歌うことができるような教え方が、すごくいい勉強になりました。

4

朝の会で、きれいな声、優しい声と言いがちだけど、保育者は“丸い声”と表現していて、子どもはそちらの方がイメージがつかみやすかったのか、一気に見違えるほどきれいになって、全体がそろった。

5

作品作りの時、説明をしているんだけど、子どもに問いかけるように話していた。必要最低限のことを言い、子どもが自ら発想を広げられるようにサポートしていた。

制作などを行うとき、出来上がりの見本を見せて話をしてしまうと同じものばかりができてしまう。それは、保育者の見本を見て子ども達が「いいな」と感じ、真似するからである。

できるだけ仕上がりを見本を見せずに、個性豊かな作品を作りたいと思ったとき、導入での保育者の「言葉」が大切になってくる。子どもの想像力を膨らませるように、また、早く「この活動を早くしたい」と思わせるような導入をすることで作品の仕上がりも変わってくる。ただ、仕上がりだけにとらわれず、制作していく過程を大切に保育したい。

V. 子どもの活動を中断せずに危険を回避する

1

朝の登園後のホールでの自由遊びをしている時に、年少の子どもが大きいブロックで基地のようなものを作ろうとしていた。高さが高くなってきて持ち上げるのが危険そうだなと思っていた時に、先生が「先生もこれお手伝いしていいかな?」と声かけをしていまし

た。

危ないからとかではなく子どもが素直に援助をたのめるいい言葉だなと思いました。

Ⅲのエピソードでは、危険なことや素直に自分のしたことを認められない時、保育者が厳しい言葉をかけていた。ここではわざと危険なことをしているわけではないが、遊んでいるうちにこのまま続けると危険だという場面での「言葉」かけである。遊んでいる子どもたちは、決してふざけているわけではない。一生懸命遊んでいるうちに、積み木がどんどん高くなるなどということは、保育の場面ではよくある。ここで保育者が「危ない!」と言って介入することも全面的に間違いではない。ただ、子どもの気持ちや遊びは途切れてしまう。

この保育者のように、「お手伝い」という「言葉」を使うことで子どもの遊びも気持ちも途切れることなく危険も回避できている。機転を利かせた良い事例である。

VI. 挨拶をしない

1

園外から戻ってきた時に「おかえり」と待っていた先生の挨拶に返しがなかったりお昼寝の前の「おやすみなさい」にも返しがなかった時、先生が子どもたちに挨拶の話をしていました。

いきなり、挨拶しなさいではなく「いってらっしゃいって言われたら何て言う?」と言う感じに皆で確認してから話していました。その後に「挨拶は基本です。してくれるととても嬉しい気持ちになります」と優しく丸く話されていたのが印象深かったです。また、皆の挨拶が増えた時に「皆が挨拶してくれて嬉しい」と子どもたちに話していて、子どもたちも楽しみながら進んで挨拶するようになっていてとても良かったです。

子どもは、案外挨拶をしないものである。もちろん、自分から率先してする子どももいるし、率先して挨拶する対象人物もいる。担任の保育者に対しては、自分から率先して挨拶をする。しかし、それ以外の保育に関わる人に対しては、こちらから挨拶をしても返さないことも多い。これは、筆者の経験からである。子どもたちには何度も挨拶についての話をしたが、担任以

外の人に対しての挨拶は身につかなかった。

これはどうしてか。保護者が挨拶をしないからである。意外に思うかもしれないが、自分から率先して挨拶をする保護者は減っている。また、こちらから挨拶をしても、小さな声で返すのはまだ良いとして、頷くだけということも多々ある。さらに保護者同士でおしゃべりに夢中になっている場合などは、こちらが挨拶をしても全く気付かないこともある。これでは、子どもが挨拶をしないのも無理はない。

このエピソードを読んで、どの園の子どもも同じだと痛感した。

VII. 丁寧な「言葉」遣い

1

保育者は子どもに対して、丁寧な言葉遣いで話していたのがとてもいいなと思った。例えば、おはしやお弁当やお机など物に対しても丁寧な言葉を使っていて、また、「うまい!」とか言っている子どもには、「おいしいでしょ」と言っていたのがとてもいいと思った。

学生は保育の現場へ行くと、普段自分たちが使うことのないような「言葉」を耳にする。それが、このエピソードにあるような『おはし』『お弁当』『お机』等である。『おはし』『お弁当』はまだしも、『お机』は、本当に必要な『お』なのであろうか。

田上・高荒(2006)は、著書の中で、一部の幼稚園で使われている独特の「言葉」遣いを『幼稚園語』と表している。それは、『おままごと』『お歌』式に『お』という尊敬の接頭語の多様を代表とするていねいな表現としている。

また、『お』ことばは、宮中の流れを引いており、物事を上品に表現しようとする女性の心情に根ざすものであるとしている。『幼稚園語』の例として、『お歩き』『お絵かき』『お並び』『おままごと』『お歌』などがある。

しかし、『保育に当たっては、ごく普通のことばを用いた方が自然だと思います。「お」ことばの使用も他の敬語と同じく、平明簡素でありたいものです。』としている。

幼稚園で当たり前のように使われている「お」ことばは、学生にとって上品に、丁寧に聞こえたとしても無理もないことである。

VIII. 子どもたちの考えを聞く

1

子どもたちが、ワニさん鬼ごっこをしているときに、1人の女の子がつかまってばかりで泣いてしまいました。その子は、先生のところに行って、先生は、子どもたち全員集めて話をしていました。先生は、子どもたちに、どうやったらつかまらなかったのかとか、いろんな質問をしていました。子どもたちは、1人1人立って、こうしたらいいとか、ずっと私もつかまってばかりで悔しかったとか、あきらめないで次は頑張るとか、子どもたちの考えが聞けるととても良い質問と場面だなと思いました。

ひとつひとつのことに、ほめたり、認めていた部分がとても良かったと思いました。

トラブルが起こったとき、保育者が話をまとめてトラブルを解決することは、たやすい事である。しかし、それで一人ひとは納得しているのだろうか。

ここでは、鬼ごっこで一人の女の子が集中攻撃を受けている。子どもたちを注意して、その場をおさめ、続きをさせるのは簡単であるが、このクラスの保育者はそうはしていない。

子どもたちを集め、問題提起をし、子どもたちの考えや思いを聞いている。また、聞かせている。それにより、集中攻撃を受けていた女の子だけでなくそれまでに嫌な思いをしていた子どもも自分の気持ちを話している。

こうすることで、自分の思いを伝えるだけでなく、友達にも思いや考えがあることを理解していく。そして、一人ひとりが納得して遊びを進めることができいく。

これは、IIのエピソードの中にある「自分の思いや考えを伝える」ということにも通じていく。

IX. 会話のきっかけ作りをする

1

帰りの会の時、先生が「あと、4回寝たら、遠足です」と子どもに伝えていました。子どもはその日から毎日「先生、あと何回寝たら遠足?」「遠足もうちょっとだね!」など、子ども同士での会話ははずんでいて、先生のたった一言を、子どもはずっと覚えていた。

またその一言で、子ども同士のコミュニケーションもはずんでいて、先生の言葉一つでこんなに変わるんだと思いました。

遠足は子どもたちにとって、待ち遠しいイベントの一つである。それを保育者が、子どもたちに一言語りかけることで、より楽しみが増している。

保育者の一言でこれだけ、子どもたちの会話が何日も、(おそらく遠足当日まで続いたであろう) 続くのであれば、これと反対のことも十分に起こりえる。

保育者の心無い一言が、子どもたちを傷つけ、その「言葉」をいつまでも忘れることのできない、嫌な思い出となって残ってしまう、ということも時にはあるかもしれない。

それだけ保育者の発する「言葉」は、子どもたちに影響を与え、子どもたちの表現を左右すると言っても過言ではないであろう。

X. 気持ちを代弁する

1

三歳の男の子が、お外で鬼ごっこをすることになった時「トイレに行きたい」と言い、一緒に行ったのですが、トイレが終わるとそのままお部屋に入ってしまう出てきてくれませんでした。私が「どうしたの?」と聞いても黙ったままの状態でした。副担任の先生が来てくれました。「怖い?」と聞くと、その子はうなずきました。鬼ごっこで追われるのが怖かったみたいです。副担任の先生は「じゃあ、一緒にしなくてもいいから、お外に出て見ていよう」と言い、その男の子は外へ出ました。

外に出た男の子を見た担任の先生は、「おいで」と手をつないで連れて行ったので「大丈夫かな?」と思いました。けれど、その男の子は一緒に楽しそうに遊んでいました。

後で担任の先生に聞くと、「あの子は、何でも怖がってしないけど、少し背中を押すだけで中に入っていけるから」と言っていました。さすがだと思いました。

ここでは、怖がりの男の子の「怖い」という気持ちを副担任である保育者がまず代弁している。それにより、この男の子は、自分の気持ちが保育者に伝わったと安心したと思われる。その後、「背中を押してもらった」時に、すんなり活動に入っていた。

まずは、気持ちを汲んでそれを伝えることをした副担任の行動と普段の男の子を理解して手を差し伸べた担任の連携による保育である。

複数担任制の良い事例である。

4. まとめ

初めての教育実習で学生が良いと思った保育者と子どもの「言葉」を集めてきた。「良い」という感覚は、人それぞれである。何を持って「良い」とするのかについて、今回は学生たちが率直に感じた気持ちを中心に進めてきた。この「良い」中には、保育者が保育の先を見通しての「言葉」も多くあった。だが、逆に何気なく使っている「言葉」も中にはあった。何気なく使っている、当たり前のように使っている「言葉」が良いものばかりとは限らない。

保育者も人間であるので、常に間違いなく話をすることはできないであろう。だが、間違えることもあることを自覚しながら「言葉」を使うのとそうでないのでは、「気づき」という点で大きく異なってくると考える。

子どもたちは、毎日保育者の「言葉」を聞いて過ごしている。その「言葉」から、自分の思いや考えを聞いてほしいと思えたり、この保育者には、何を言ってもわかってもらえないと思ったりすることもある。

保育者が、自分の「言葉」に責任を持つというのは、子どもの「言葉」に責任を持つということにつながるのではないだろうか。それだけに、初めて出会う保育者の「言葉」は重要である。

学生にはそのことを今後の「保育内容・言葉」の授業の中で学んでいってもらいたい。間違えることがあるにしても、自分の「言葉」に責任を持ち、子どもたちの思いや考えを引き出せるような「言葉」を話せる保育者になってもらいたい。また、授業の中でも自分の「言葉」に責任がもてるような意識付けができる授業を心がけていきたい。

5. 引用文献・参考文献

- 亜森瑪依拉・横山文樹(2011)学苑・初等教育学科紀要 No.848 pp.69~70 昭和女子大学
本吉園子+笠間典美(1981)「私の保育どこが問題?」 pp.207~208 フレーベル館
今井和子(1996)「子どもとことばの世界―実践から捉えた乳幼児のことばと自我の育ち」 pp.227~229、233 株式会社ミネルヴァ書房
田上貞一郎/高荒正子(2006)「保育内容指導法「言葉」」

pp.14～15 双文社出版

萩原光/渡部久美子(2016)「子どもも大人も元気になる
保育」 p11 (株) ひとなる書房

ピアスーパーバイザーからのコメント

本論文は、初めての教育実習で学生が良いと思った保育者と子どもの「言葉（会話）」を集め、まとめたものです。考察では、「I. 注意するのではなく、認めて気づかせる」から始まり「X. 気持ちを代弁する」まで、言葉（会話）に関する学生たちの気づきが、その使われた場面と共に詳細に記述、分析されています。これらの教育実習の場における気づきを、今後の「保育内容・言葉」の授業の中での学びに橋渡しすることで、実践と教育の両輪により、学生たちに対するさらなるエンパワーメントが図られることを期待します。

(担当：田邊 文彦)